

## P10-194

### 標準予防策と口腔ケア手順遵守を目指したスタッフ教育の取り組み

旭川赤十字病院 SCU

○岡田 愛弓、森谷 美紀、中田 智恵、久保 幸代、  
吉川 真弓、池田 亜紀、高津 瑞恵、田端 五月

【はじめに】脳卒中の急性期患者は意識障害・麻痺・嚥下障害により肺炎等の呼吸器感染を起こしやすい。スタッフ全員が統一した感染予防策を行う教育が重要であると考えた。

【研究目的】標準予防策と口腔ケア手順に関するスタッフへの教育を行い、遵守の評価をすることを目的とした。

【研究方法】研究期間は2009年4月～9月。研究対象はSCU看護師全37名。スタッフ教育として標準・接触予防策の勉強会を感染管理認定看護師に依頼しスタッフ全員が参加できるよう企画した。また、口腔ケアマニュアルを見直しスタッフ全員に実技指導を行った。評価方法として(1)標準予防策チェックリストの他者評価(2)手指衛生・PPE着脱の自己・他者評価(3)口腔ケアチェックリストの自己・他者評価(4)擦式消毒剤の使用量・グローブの払い出し量を教育前後で比較した。

【結果】チェックリストの結果、標準予防策は11項目で89.1%達成、口腔ケアは8項目で100%達成した。擦式消毒剤・グローブの使用量は増加した。

【考察】全スタッフが標準・接触予防策の勉強会を受講したこと、実技指導を行い自己・他者評価のチェックリストを施行したことが手技習得につながった。感染管理認定看護師を活用したことも効果的だった。擦式消毒剤使用量・グローブ払い出し量が増加したことは標準予防策の遵守が向上したことの裏付けとなった。標準・接触予防策と口腔ケアの実践を徹底することで今後の呼吸器感染減少が期待できる。

【結論】スタッフ全員が確実に教育を受け、実践確認のチェックリストを用いた評価を行うことは感染予防策の遵守に有効である。

## P10-196

### 課題達成型糖尿病看護学習会の試み第2報—4年間の成果と意義を考察して—

長岡赤十字病院 看護部<sup>1)</sup>、成田赤十字病院<sup>2)</sup>、  
小川赤十字病院<sup>3)</sup>、日本赤十字社医療センター<sup>4)</sup>、  
前橋赤十字病院<sup>5)</sup>、武蔵野赤十字病院<sup>6)</sup>

○田井 由子<sup>1)</sup>、青木 美智子<sup>2)</sup>、金子 貴美江<sup>3)</sup>、  
今野 康子<sup>4)</sup>、高木 あけみ<sup>5)</sup>、豊島 麻美<sup>6)</sup>

【目的】糖尿病看護認定看護師企画による学習会(以下、本学習会とする)の第1回参加者の反応と課題を平成19年度に報告した。その後の4年間に亘る本学習会の成果と意義について考察したので報告する。

【方法】本学習会の目的は各施設の糖尿病看護の質向上と糖尿病看護におけるリーダーシップを養うことである。その目的と照らし、参加者及び上司アンケートの結果をもとに考察した。

【結果】本学習会には東部ブロック20施設各1～2名が参加し、第1～3回は課題への取り組み、第4回はフォローアップとした。参加者は、「自己の成長」[ネットワーク拡大][システム構築への自信][課題への意欲向上]を成果とした。第4回では、活動上の相談・協力者の存在が明らかになった。また73%が「ディスカッションは有意義」、96%が「今後も学習会に参加希望」、92%が「自己の方向性を見出した」とした。上司は、院内の糖尿病看護の質向上には至らないが、部署レベルでは周囲に良い影響を与え動機付けになったと回答した。

【考察】背景の異なる者との意見交換は自己の意識に働きかけ意欲向上につながっていると考える。そして、システム作りからネットワーク作りへと、周囲を巻き込みながら活動する過程を通してリーダーシップを発揮し、更に本人の自覚も高まっている。また、相談・協力者の存在や上司参加の成果発表は自分を認めてもらう機会となり参加者の推進力にもなっている。以上より、ディスカッションを中心とした本学習会は周囲を巻き込みながら課題を達成する上で効果的であり、リーダーシップを養うという目的において意義があると考えられる。

## P10-195

### ウォーキングカンファレンスを導入しての意識調査

日本赤十字社長崎原爆諫早病院 看護部

○松山 綾子、畑上 優雅、橋浦 悠花、中村 浩子

【はじめに】私達は2009年7月よりウォーキングカンファレンスを導入し実施している。導入後1ヶ月と3ヶ月後に看護師へのアンケート調査を実施しウォーキングカンファレンスの現状を評価し今後の課題を示唆することができましたので報告します。ウォーキングカンファレンス=以下WCと略す。

【研究方法】看護師22名をA群B群の2群に分類しアンケート調査を実施。

【結果】新人看護師は先輩看護師の患者への対応や状態報告をWC時に実際見ることによってコミュニケーション技術や知識の習得を得る機会となっている。また、慣れてくると少しずつではあるが新人看護師がWC時自分の意見を述べカンファレンスに反映されていると感じている。その反面、経験に自信がなく発言する機会が少なくWCにおいてリーダー的な役割がなされていないと感じている事がわかる。また、患者参加型のWCとしては患者とコミュニケーションをとることを患者参加と考えている。つまり患者と共に看護計画の立案・修正を行うまでが患者参加型のカンファレンスと目標も高く、あまり実践できていないと評価している。しかしWCを導入することでチーム全員で患者を観察し、患者に対する意思統一・共通認識の場として効果的な結果が得られている。

【まとめ】(1)学習の機会としてはコミュニケーション技術や知識の習得の場となり、後輩育成の役割を果たしている。(2)新人看護師は送りを聞き、患者への挨拶のみで満足している部分もあるが経験ある看護師はカンファレンスの計画・立案・修正まで患者と共にやる事を目標にしている。

【今後の課題】WCが日勤スタッフ中心のカンファレンスとなり、ベットサイドでの活発な討議を行えるように勉強会を再度行っていきたい。

## P10-197

### 糖尿病リンクナース委員会の現状と課題

小川赤十字病院 看護部

○金子 貴美江、川崎 つま子

【はじめに】糖尿病患者は専門病棟で治療看護を受けられることが望ましいが、糖尿病以外の病気で入院の場合、専門病棟以外にも約1割から2割(4～10名)糖尿病を持つ患者が入院している。しかし、スタッフの糖尿病に対する関心が薄く、糖尿病患者は敬遠されがちであった。そこで院内の糖尿病看護のレベルを底上げし、標準化するために、糖尿病のリーダー的ナースを各病棟に育成する目的とし『糖尿病リンクナース委員会』を立ち上げた。

【方法】看護単位ごと各2名の経験年数3年以上のスタッフを集め毎月1時間～2時間の委員会を開催。内容として1.ヒヤリハットの分析2.糖尿病の治療・看護に関する検討3.ニュースレターを発行。糖尿病リンクナース委員会で得た内容は自部署に伝達講習する。

【結果・考察】開催1年目(平成18年)～2年目(平成19年)糖尿病の勉強会が主となり知識をつけることに重点を置いた。開催3年目(平成20年)糖尿病患者に関するヒヤリハットの分析結果からインスリン注射のマニュアルを作成した。開催4年目(平成21年)糖尿病リンクナース委員以外の看護師から定期的な勉強会の開催を望む声が聞かれたため、看護師全体の勉強会を実施。また、新しい情報はニュースレターを発行し情報を流すことができた。糖尿病リンクナース委員の感想として1.糖尿病という病気は奥が深い。2.主疾患以外でも糖尿病看護は重要。3.糖尿病が、より理解できた。などの感想が得られた。また、行動の変化として糖尿病に関連したヒヤリハットの件数もわずかだが減らすことができた。

【まとめ】糖尿病リンクナース委員会の活動が、院内看護師の糖尿病に関する意識を変化させることができた。今後は、糖尿病リンクナース委員が定期的に病棟をラウンドし、糖尿病に関するヒヤリハットの減少を目指し活動していきたい。